

Contents *****

特集：初の「ヴァーチャル」民主党大会を視る	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
”What Kamala says about Joe” 「カメラで分かるジョーのこと」	7p
<From the Editor> 日本は米民主党が苦手？	8p

特集：初の「ヴァーチャル」民主党大会を視る

今週は8月17日から4日連続で、米民主党大会が行われました。通常であれば、会場であるウィスコンシン州ミルウォーキー市には数万人が訪れ、政治家やスタッフや党员やジャーナリストたちで賑わいを見せるはず。ところが今年はCovid-19のパンデミックにより、史上初の「ヴァーチャル党大会」となりました。

党大会と言えば、①正副大統領候補の決定、②政策綱領の公表、③大統領候補の受諾演説などが注目点となります。ところが今年は、これら全てをオンラインでやらなければならない、異例の事態が続出しました。さらに来週は、8月24日から共和党大会が控えている。「ヴァーチャル党大会」の成否は、今後を占う上でまことに重大です。

以下は、同時進行で書いてみた民主党大会ウォッチングの記録です。

● 1日目：「ヴァーチャル党大会」の限界を感じる

ありがたいことにヴァーチャル党大会は、日本に居ながらフォローできてしまう。何しろ民主党大会のHPで全部公表されるのだから¹。

通常であれば1日がかりの大会が、2時間少々(ET21:00-23:00)に集約されているのも大助かりである。ライブで見たければ、時差を考慮して午前10時から2時間ということになるのだが、後からビデオクリップで見るのであればいつでも構わない。リモート方式で受講する大学の講義とは、こんな感じなのかと思うと何とも味気ない思いがする。

民主党大会初日を、筆者は火曜日の帰宅途中の電車の中で見始めた。が、すぐに飽きてしまった。ただただ民主党を盛り上げ、ジョー・バイデンを褒め称える内容を、2時間17分という長尺で見続けることは、心躍るような体験ではなかったのである。

¹ <https://www.demconvention.com/>

例えば、全米各地の支持者が Zoom でそれぞれに国歌を斉唱する、なんてパフォーマンスが登場する。よく出来ているのだけど、どこかの代理店が高額の予算で作っているのだろう、という印象をぬぐえない。ジョージ・フロイドさんの兄弟とか、トランプ支持者のお父さんをコロナで亡くした娘さんとか、いろんな人が登場するのだが、いかにも予定調和的な進行である。個人的には、アムトラック職員が登場して、バイデン氏が電車で片道 1 時間半かけてワシントンに通勤していた思い出を語るシーンは良かったと思う。

普通の党大会であれば、弁士がひとり 20 分とかの時間を与えられて、それぞれがライブで演説を行う。誰がいちばん受けるか、面白いことを言うかを政治家たちが競い合う。観衆は拍手やブーイング、ときには退屈そうな仕草でこれに応える。政治家が鍛えられ、次のリーダーが誕生する場と言っているだろう。2004 年の民主党大会では、元イリノイ州議会の上院議員に過ぎなかった若き日のバラク・オバマが名演説を行い、一躍存在を知られるようになった。しかるに映像を編集し、「作り込んで」放送するこの方式では、次世代のスターが見出されることはあるまい。これはヴァーチャル党大会の明らかな限界である。

細切れのビデオクリップは、ほとんどが事前収録である。副大統領が誰になるかわからない時期に収録されたものも多かったはずだ。普通の党大会では、「バイデン＝ハリス」というチケットの名前を連呼するのだが、今年はそうではない。何しろ副大統領が決まったのは前週火曜日の 8 月 11 日だったから。もっと言えば、副大統領候補に指名される可能性があった人たちの収録は、指名が終わってから駆け込みで行われたことになる²。

その点、「自分に関係ない」立場のスピーカーの方が印象的であった。コロナとの戦いを語ったアンドリュー・クオモ NY 州知事は抜群の存在感であったし、途中で自発的に候補を降りたエイミー・クロブチャー上院議員は、いつもと変わらず飄々としていた。それからジョン・ケイシック元 OH 州知事は、他の 3 人の共和党员とともにトランプ批判を語った。と言っても、これらのスピーカーはそれぞれ 3 分程度の登場なのである。

最後まで戦ったバーニー・サンダース上院議員が、ようやく 6 分を与えられていた。党の結束を呼び掛け、とにかく今度の選挙は大事だから、トランプを引き摺り下ろすためには自分は保守主義者とも組む、相変わらずの迫力で語った。支持者に向けて革命を呼び掛けたあのバーニーが、最後は党大会で妥協を呼び掛けるというのは皮肉な構図であった。

最後はミシェル・オバマ夫人で、これも収録で 20 分くらいであった。「ドナルド・トランプはこの国には間違った大統領である」という強烈な批判を繰り返した。これがライブであれば、大観衆はスタンディングオベーションで応え、何度も演説は中断されたはずである。ところがそうした熱狂は生じない。

「ヴァーチャル党大会」に対しては、しばしば”Unconventional Convention” (常ならぬコンベンション) という言い方がされる。まじめな話、この方式が当たり前 (Conventional) になってしまったら、米国政治が失うものは非常に大きいのではないかと思う。

² 3 日目に登場したエリザベス・ウォーレン上院議員は、熱がこもっていないスピーチに思えたが、無理もない話であろう (自分が副大統領に指名された時の演説は準備していただろうが…)。

● 2日目：「プラットフォーム」を読んでみる

2日目のスピーカーは、ビル・クリントンやジミー・カーターなどの元大統領、ジョン・ケリーのような元大統領候補など、やはり重鎮が顔を揃えている。ただしこの日は「党の正式候補の指名」と「政策綱領（プラットフォーム）の公表」という2つの重要イベントも用意されている。ここはひとつ、政策面に着目してみよう。

本誌の7月17日号で、「バイデン＝サンダース統合タスクフォース」で**6本柱の政策提言が公表された**ことをご紹介した。これを今回のプラットフォームと比較してみると、「政策が作られる過程」が浮かび上がってきて興味深い。

<バイデン＝サンダース統合タスクフォース>

- ① Combating The Climate Crisis And Pursuing Environmental Justice (気候変動)
- ② Protecting Communities By Reforming Our Criminal Justice System (刑事司法改革)
- ③ Building A Stronger, Fairer Economy (経済)
- ④ Providing World-Class Education In Every Zip Code (教育)
- ⑤ Achieving Universal, Affordable, Quality Health Care (医療)
- ⑥ Creating 21st Century Immigration System (移民制度)

<民主党政策綱領 2020>

- (1) Protecting Americans and Recovering From the Covid-19 Pandemic (コロナ対策) ←
- (2) Building A Stronger, Fairer Economy (③経済) ↑
- (3) Achieving Universal, Affordable, Quality Health Care (⑤医療) ↑
- (4) Protecting Communities By Reforming Our Criminal Justice System (②刑事司法改革) ↓
- (5) Healing the Soul of America (マイノリティ対策) ←
- (6) Combating The Climate Crisis And Pursuing Environmental Justice (①気候変動) ↓
- (7) Restoring and Strengthening Our Democracy (選挙制度) ←
- (8) Creating 21st Century Immigration System (⑥移民) ↑
- (9) Providing World-Class Education In Every Zip Code (⑤教育) ↓
- (10) Renewing American Leadership (外交) ←

6本柱は文字通りの「たたき台」であって、そのまま綱領の中に残っている。「気候変動」の部分などは、ほとんど文言が変わっていない。ただし順序を入れ替えて、関心が高そうな「経済」や「医療」の順位を上げている。「民主党員」と「一般国民」では関心の度合いが違うので、その点を調整したのであろう。

さらに世間的に関心が高いテーマを4つ、後から書き加えている。「コロナ対策」「マイノリティ」「選挙制度」、そして最後に「外交」である。

とはいうものの、「バイデンとサンダースのチーム」（党内中道派と左派）が1カ月以上議論を積み上げてきた6つの柱に比べれば、相対的に軽い位置づけとなる。特に「外交」が「付け足し」で書かれていることは、海外から見て残念なことである。

さらに「アジア太平洋」に関する部分は悲しいほど短く、1ページ強しかない。ところが日本の新聞各紙などでは、「中国に対してこんなに厳しいことを書いている」などと指摘している。確かに通商、航行の自由、台湾、香港、ウイグルなどの問題を取り上げてはいる（ただし関税戦争には反対）。対中政策を掘り下げて議論をした結果ではなさそうなので、少し割り引いて読むべきではないかと思う。

ちなみに地域政策の部分は、「国際通商経済」「アフリカ」「米州」「アジア太平洋」「欧州」「中東」の順序で書かれている。この序列を見るだけで、プラットフォーム「外交編」に期待はできないと思ってしまうのは筆者だけだろうか。

● 3日目：民主党の「女性パワー」を実感する

ヴァーチャル党大会の3日目は、在宅勤務の日でもあったのでライブで見ることにした。午前10時から正午過ぎまで、「飛ばし見」をすることなく鑑賞してみた。

この日は女性のスピーカーが多い。エリザベス・ウォーレンは、「チャイルドケアを家族のインフラに」と語った。ナンシー・ペロシーは、さすがは米国版・二階幹事長、天衣無縫にして天下無敵であった。前回の大統領候補であるヒラリー・クリントンは、「トランプには大差で勝たなければならない」とのたまう。ご自分は4年前に300万票差をつけたけど負けたと言いたいのだろうか、正直「よく言うよ」の感がある。

この日の真打はバラク・オバマ前大統領で、フィラデルフィアの独立革命博物館から登場した。ヴァーチャル党大会では貴重なライブ映像である。合衆国建国の理想について語りつつ、「トランプとその支持者たちはこの原則を信じていない」と批判した。元大統領が、これだけ現職を批判することはめずらしい。それくらい「民主主義への危機感」を感じているのであろう。とはいえ20分近くの長広舌であることと、いかんせん「上から目線」で説教くさいところがあり、「トランプ支持者」を悔い改めさせる効果はなさそうである。

最後に登場したカーマラ・ハリスは安定の演説であった。最初に「19歳でこの国にわたってきた母のこと」を語るのであるが、おそらく何百回も人前で語ってきたテッパンの物語なのであろう。肩の力の抜け方といい、笑顔の使い方といい、これはもう政治家として完成形の語り口である。変な話、副大統領候補に学者のスーザン・ライスを選んでいたら、こうはならなかっただろう。

それでこんなことを言うのである。

「25歳で、150センチしかないインド人女性が、カリフォルニア州オークランド市のカイザー病院で、私を生んだときのことを思わずにはられません。彼女は今日、私がこの場で皆さんの前でこんなことを言うとは、思いもよらなかったことでしょう。『私はアメリカ合衆国副大統領への指名を受諾いたします』と」。

もうひとつ、万事が予定調和的に流れていくヴァーチャル党大会において、数少ない「番狂わせ」を演じてくれたのが AOC ことアレクサンドリア・オカシオ＝コルテス、弱冠 30 歳の女性である。左派のニュースターである彼女に与えられた時間は、2 日目のわずか 1 分 30 秒。たぶん不満はあっただろうが、いつもの主張とともに、歯切れよく「バーニー・サンダース支持」を表明してみせた。堂々たる予備選 2 位候補であるから、これは反党的な「裏切り行為」に当たることはない。多くの進歩派が留飲を下げた瞬間であろう。

細かく数えたわけではないのだが、今年の民主党大会は登場するスピーカーの男女比がほぼ半々くらいである。非白人の比率も非常に高い。4 日間の大会で、それぞれ最後を締めるスピーカーは 1 日目がミシェル・オバマ、2 日目がジル・バイデン夫人、3 日目がカーマラ・ハリス（副大統領候補受諾演説）、そして 4 日目がジョー・バイデン本人なので、とにかく女性の比率が高いのである。

仮に来年、バイデン政権が発足するとしたら、閣僚ポストの半分くらいは女性が占めるのではないだろうか。スーザン・ライス国務長官、ミシェル・フロノイ国防長官、ラエル・ブレイナー財務長官などの名前がすぐに思い浮かぶ。この点でまったく遅れている日本としては、居心地の悪い思いをすることになるかもしれない。

● 4 日目：いよいよ「Unconventional な」大統領候補が誕生

昨日、筆者が自宅でヴァーチャル党大会を見ていたら、娘（在宅の大学生）が後ろからぼそっとこんなことを言うのである。

「これだけ大勢の人が出ているのに、誰も言い間違いをしないのは不思議」。

素人の観察眼は、ときに怖いものである。ヴァーチャル党大会はまさしく「作りもの」。台本があって、何度も練習して、撮り直しもして、編集した上で放映されている。そして司会者が次から次へとよどみなく紹介していく。言い間違いが起きるはずがない。

と思ったら、4 日目には「吃音を抱えた 13 歳の少年」が登場した。ニューハンプシャー州を訪れたバイデン氏と出会い、そのアドバイスを受けて努力しているとのこと。バイデン氏は若い頃に、声を出してイエーツの詩集を読むことで吃音を克服した。13 歳の勇氣ある出演には拍手を送りたいが、いかにもあざとい演出と言えよう。

そうかと思うと、予備選を戦った 7 人の候補者が Zoom で談笑する場面も登場した。サンダースやウォーレンやクロブチャーが、まことに和やかな雰囲気ですべて「バイデン氏に関するちよつといい話」を互いに披露しあう。まるでリモート版の「笑点・大喜利」を見ているようで、ここはめずらしく自然に笑える瞬間であった。

とはいえ、4 日目の主役はジョー・バイデンその人である。今週の The Economist 誌の記事（“What Kamala says about Joe”=本号 P7 で紹介）にもある通り、バイデンの作戦は「ステルス選挙戦」である。つまり自分はなるべく目立たないようにして、トランプの自滅を待っている。その間に、資金集めや政策調整など裏の仕事はしっかりやっているのです。本誌では「昼行燈方式」と命名している。

問題はバイデン氏が、「自分はこんな大統領を目指す」という理想を語っていないことである。そこで党大会の華というべき受諾演説 (Acceptance Speech) に注目しなければならぬ。ところがバイデン氏の登場は、開始から実に1時間50分後のことであった。

受諾演説に対する感想その1は、非常に短かった (24分) である。ヴァーチャル党大会ではすべてのスピーチは短めとなるし、聴衆の拍手による中断も起きないので、これは不思議ではない。しかし4年前のトランプ氏は、受諾演説で延々1時間15分も語り続けた。迫力や熱気という面では、やはり物足りないものがある。

感想その2は、「やっぱりトランプ批判」だった、である。あれだけ多くのスピーカーが批判した後なのだから、大統領候補はもっと「トランプを倒した後のこと」について語ってもいいところである。とはいえ、面白いことにバイデンは一度も”Trump”とは言っていない。”Current President”などと言い換えて、”Unforgivable” (許せない) としている。

感想その3は、詩的で内省的な語り口であった、ということである。“I will be an ally of the light, not the darkness.”というように、「光と闇」という言い方が多用されていた。縮めの部分では、アイルランド詩人 Seamus Heaney の詩を引用している。久々にオバマ風の演説を聞いたという印象があり、これはトランプ時代には絶えて久しい感覚である。

どこがいちばん印象に残ったかと言えば、バイデン氏がジョージ・フロイド氏の6歳の娘に会ったときに、「パパは歴史を変えた」 (Daddy changed the world.) と言うのに胸を打たれた、という話であった。やはり共感性が豊かな人であって、この人間性が最大の「売り」であろう。そしてまた、現職大統領との差別化要因になるのではないだろうか。

つくづくジョー・バイデンは、Unconventional (常ならぬ) 政治家である。カリスマ性に乏しく、演説もうまくない。予備選段階では、何度も「泡沫」扱いされた。高齢過ぎて、”Sleepy”などとも呼ばれる。そして党大会のときでさえ、自宅があるデラウェア州ウィルミントンから離れない。2020年のような途方もない年でなければ、大統領候補となるチャンスは巡ってこなかっただろう。それだけに、打倒トランプの勝機があるのかもしれない。

さて、4日間の日程を終えたバイデン夫妻は、ハリス夫妻とともにマスク姿で屋外に姿を現した。するとそこには多くの支持者がクルマで詰めかけていて、クラクションを鳴らして歓迎した。花火も打ち上げられて、少しだけ普通の党大会らしい雰囲気が出てきた。ソーシャル・ディスタンス時代の選挙運動は、なんともやりにくいものである。

政治のことを「祭りごと」ともいう。人と人が触れ合う「お祭り騒ぎ」を抜きにしたら、政治とはなんともつまらない作業になってしまう。とはいえ、今の米国は多くのスピーカーが散々語った通り、「500万人の感染者と17万人の死者」を出している。「ヴァーチャル党大会」も、よんどころない事情によって行われた次善の策なのである。とりあえず今は、「事故がなかった」ことを称えるべきなのかもしれない。

と、ここまで書いて筆者は、「この4日間はずいぶん『ないものねだり』を書いてしまったな」と悔やみ始めているところである。

<今週の”The Economist”誌から>

”What Kamala says about Joe”

「カーマラで分かるジョーのこと」

Leaders

August 15th, 2020

***党大会の1週間前、8月11日にバイデン氏の副大統領候補にカーマラ・ハリスが指名されました。それが何を意味するのか、The Economist 誌の解説を聞いてみましょう。**

<抄訳>

これまでのバイデン戦略は、なるべく姿を見せないことであった。大統領が出ずっぱりで、コロナの死者と経済の苦境が目立つほど、バイデン陣営には好都合。今まではそれでよかった。世論調査では9pもリードしている。年初までは考えてもいなかったことに、民主党は上院逆転の可能性もある。3連単（Trifecta）が成立すれば米国の権力構造は一変する。

だが何のために？ 勝つためのステルス選挙戦もいいが、彼はどんな大統領になるのかを明かしていない。カーマラ・ハリスを同志に選んだことは、彼にとって初の大きな決断であり、将来の意思決定方式やバイデン政権の思想傾向への示唆を与えるものとなる。

副大統領として8年間を過ごしたことが、その根底にある。彼は序盤の討論会で最も自分を苦しめた候補者を選んだ。つまり恨みはない。初の黒人女性、初のアジア系として最良の人物を選んだ。彼女はサンフランシスコ市検察官、州司法長官、上院議員を経ている。バイデン氏は能力ある統治への回帰を約束するが、副大統領候補の職歴はこれを裏付けている。

バイデン氏と同様、彼女は民主党中道派である。気候変動でも医療制度でも官民関係でも、革命を叫ぶのではなく地道な変化を通して前進することを意味する。彼女の負い目は、検察官としての過去だ。加州の刑務所は満杯、保釈金制度も機能していない。大麻合法化に反対し、非暴力犯罪も容赦しなかった。しかしトランプ氏が目指す「法と秩序」選挙となれば、この記録はむしろ利点となる。「彼女は犯罪に弱腰」という批判だけは当てはまらない。

イデオロギー色が薄いことも選挙にはプラスだ。トランプ選対は「いかさまハリス」なるCMを用意し、過激な左派だとレッテル貼りしている。トランプ氏の侮辱には、得てして一面の真理がある。予備選で彼女は民間保険の廃止に同調していた。それではトランプ再選に塩を贈ると見るや、折衷案に与した。節操がないけれども、柔軟性があるともいえる。

つまり彼女はバイデンに似ているのだ。ときに副大統領は、放蕩児トランプがお堅いペンスを必要とするように、大統領の弱みをカバーする。ハリスはもっとバイデン風で、党内でのポジションを何度も変えている。行政職でも立法でも、十分な経験を積んできた。魅力的には響かないだろうが、「バイデン＝ハリス」は倒すべき相手と実に対照的なのだ。

ハリス氏はいつか政権を引き継ぐか、みずから大統領になるかもしれない。米国の平均寿命は76歳、バイデン氏は77歳だ。11月の選挙で勝てば、代役を務める機会は多くなるだろう。負けた場合は、次回の最有力候補となる。人種問題への不安がたち込める今の米国で、ハリス副大統領は安全で無難な選択となる。それは前進の兆候である。

<From the Editor> 日本は米民主党が苦手？

日米関係のキーパーソン、グレン・フクシマ氏が、東洋経済オンラインで面白い記事を寄稿しているのでご紹介します。「日本人は世論調査では反トランプなのに、政府レベルになると『YA 論文』のように共和党支持が多くなる。それはなぜか？」という問題意識で書かれたものです。

「日本で共和党びいきが多い理由」という議論は、故・伊奈久喜氏などの前例もあるのですが、この見方も非常に説得力があると思います。なお、以下は溜池通信流に略したものですので、関心を持たれた方は是非、原典に当たってみてください³。

1. 共和党と自民党はどちらも保守政党なので気が合う。
2. 80年代以降は共和党政権の方が長かったので、日本側がそれに慣れている。
3. 共和党は自由貿易、民主党は保護主義という見方が強い（実際は必ずしもそうではない）
4. 共和党政権のOBは経営者になって、ビジネスを通じて日本との関係を維持するが、民主党政権のOBは大学やシンクタンクに行く。
5. 共和党はビジネスライクだが、民主党は理念型でめんどくさい。
6. 日本のジャーナリストや学者の中に共和党支持者が多い。
7. ウェットな共和党とドライな民主党（共和党には「浪花節」がある）。
8. 民主党が重視する「多様性」は日本人が苦手とする（ジェンダーやLGBTQなど）。
9. 理念の民主党よりも、利益の共和党の方が日本に理解を示してくれる。

上記の(4)とか(7)は、まさに「日米関係あるある」の世界でありまして、共和党の知日派と言えば、すぐにリチャード・アーミテージ以下の体育会系人脈が思い浮かびます。これに対して民主党系では、ジョセフ・ナイ教授など知的なタイプが多い。日本人は基本的に、体育会系の浪花節の方が好きですね。

さらに(8)は、まことに耳が痛い。オバマ大統領がキャロライン・ケネディ駐日大使を指名したときは、多くの日本人が文字通り米国大使館に門前市をなしたわけですが、その大多数が中高年以上の男性だった、というのは今から考えても「痛い」光景でした。日本社会はやっぱりジェンダー面で遅れている。そして過去4年のトランプ時代には、日本人はそのことをスカッと忘れていたことができた。共和党政権のときは、日本はつつい甘えて楽をしてしまう、という法則がありそうです。

しかし根源的な問題は(1)と(9)にあるわけで、日本には理念に基盤を置くリベラル政党が育っていない。2009年に誕生した民主党・鳩山由紀夫政権が、対米関係に失敗して短命に終わったことが惜しまれます。今週は、立憲民主党と国民民主党が合流に向けて一歩前進したようですが、「二大政党制」を目指す感じではなくなっているようですし。

³ <https://toyokeizai.net/articles/-/369298>

かつて入江昭教授は、日本外交の潮流を「民間の理想主義、政府の現実主義」と評しました。ところが理想主義はいつも掛け声倒れで行動に結びつかず、最後はかならず「政府の現実主義」に帰着してしまう。やはり「理屈じゃメシは食えない!」というのが、この国の政治的風土なのでしょう。今週、「ヴァーチャル米民主党大会」を見ていて、「この政党の日本におけるカウンターパートを作るのは難しいだろうな」としみじみ感じました。

ところで上記のフクシマ論文は、編集部によって「安倍政権が『トランプ再選』を熱望している理由」という「いかにも」な表題をつけられています。ところが結論部分は、「意外と変わり身が早いかもしれない」となっている。つまりトランプでもバイデンでも、日本はうまく対応していこう、という見解です。

「利」に敏い日本政治なれば、最後はきっとそうなる。全部お見通しだよ、ということでありましょう。ううむ、まったく反論できないのであります。

* 次号は2020年9月4日（金）にお送りします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記あてにお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com